
.hack//G.U ANSWER

ガチャピン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

hack / / G・U ANSWER

【Nコード】

N1152D

【作者名】

ガチャピン

【あらすじ】

2017年。ひとつの事件が起こった。その舞台は世界的ネットゲーム「THE WORLD」そこに一人のハセヲプレイヤーキャラと言うPCがいた。彼はこの事件に巻き込まれた被害者の一人。ハセヲを取り巻く者達を巻き込み、悪化していく事件。ハセヲは仲間達とその事件を解き明かしていく。

第1章 「プロローグ」

——志乃！

大聖堂に苦痛の叫びがこだまする。

——消えるな！消えないでくれよ！頼むから、消えないでくれよ

一人の少年が泣き叫んでいる。

——泣かないの、男の子でしょ？

次に聞こえて来たのは女性の優しくも悲しい声。

2017年——

世界中で大人気のネットゲーム「THE WORLD」そこは夢の楽園とは程遠く、PKが横行する恐怖の世界と化していた。

そしてTHE WORLDに起きたひとつの悲劇。その悲劇がTHE WORLDと現実とで複雑に入り組み新たな謎が生まれる。と同時にひとつの答えも生まれる。

荒野に散乱するPC達の残骸。その中に不気味にたたずむ銀髪の死神。

「俺の邪魔をするからこうなるんだよ」

彼の名はハセヲ。今回の事件の被害者の一人で、彼は今回のことで大切な人が意識不明になっている。その人を助けるために彼はこのTHE WORLDで戦っている。

「ここにも三爪痕はいなかったか」

——三爪痕
トライエッジ

このゲームをやっている人ならこの名前を知らぬ者はいない。だが、目撃した者もない。

一説ではうわさ版の怪談話しだと言う。そしてもう一説では見た者は必ず消されるから見たと言う人がいないのだと言う。それと三爪痕は蒼い炎をまとったPCだと言われている。

だが、ハセヲの大切な人をKILLしたのはこの三爪痕である。だからハセヲはこのPCを追っている。志乃を助けるために。

悲劇の舞台「THE WORLD」今この世界に起きている事は7年前に起きたゲームをしている途中で意識不明になったと言う事件と同じことが起きている。その時も又、この事件の謎を解き明かした者がいた。だがその答えが時として自分にとって都合のいい答えとは限らない。

だけど人は答えを見つけようとする。その答えが自分が望んだもの

で無いとしても。このハセヲと言っパコがそうであるように。

——この事件はハセヲの成長とともに真実へと近づくひとつの物語り。

そしてひとつの同じ答えに向かって進む仲間との絆の物語りでもある。

第1章 「プロローグ」(後書き)

また・hack／／のファンヒクションを書いちゃいました。読んでいただけると光栄です。 読

第2章 「P K Kハセヲ」

「誰か！」

荒野に響く助けを呼ぶ声。

「はん！叫んだって誰も来ないよ！」

それをあざ笑うかのようにプレイヤーキラー（P K）集団の親玉らしき女が言った。

だが、荒野の崖の上にその光景を見て笑みを浮かべるP Cがいた。そのP Cは地面を蹴り、崖の下のP K集団の中心に飛び降りた。

「だ、誰だ！？」

そのP Cは質問など聞いてははなく、背中から自分の背丈に匹敵するぐらいの大きさの剣を出すと、もう一度P K達を見回した。

しばしの沈黙が続いた後、P Kの一人で小柄の奴が叫びだした。

「思い出した！お前は…死の恐怖P K Kのハセヲ！？」

——P K Kとはプレイヤーキラーキラーの略で、一般P Cを襲うP Kを逆にP Kする者を指す言葉。

ハセヲは叫んだP Kに剣先を向け、振りかぶると他のP Kが後ろから来るのを感じ、振りかぶった大剣を横に思い切り振り、後ろのP K二人を切り裂いた。これが開戦の合図だったかのように残ったP

Kの4人が動き出した。

「喰らえ〜！」

色白で小柄のPKが武器を出しながら突撃してきたが、ハセヲは後ろに一步下がると突撃してきたPKに足をかけた。すると面白いようにPKはズッコケて顔面が地面に埋もれて動かなくなった。

続いて腹が出ている少し太り気味の大検使いが上空から剣を振り下ろしてき、横からは大鎌使いのPKが走ってきていた。だが、ハセヲは落ち着いて、自分の大検を降りてくるPKに投げ、腰から「死神の鎌」がイメージされた大鎌を取り出し、横から来るPKを大鎌の衝撃波で吹き飛ばし、上空のPKも大検が刺さり落ちてきた。

「強い…！くそー！！」

残った親玉のPKが刀剣を片手に走ってきた。さっきの手下との戦いもハセヲは圧倒的な差を見せ付けていたのだが、それでも向かってくるPKに関心しつつ、大鎌をしまいながら双剣を両手に一瞬にしてPKの後ろを取り、首元に刃を突きつけた。

「三爪痕^{トライエツ}を知ってるか？」

ハセヲは真剣に質問をしたのだが、PKはそんなハセヲを鼻で笑った。

「はあ？BBSの怪談話信じてんじゃねーよ！」

ハセヲはその後何も言わずに剣を引いた。するとPKはその場に倒れ、ハセヲは夕日を背にしてヒールド場に転がるPK達に向かつ

て舌打ちした。

「ちっ使えねーな」

——今回も三爪痕アイツの手掛かりは無しかよ。

志乃、ごめんなもう少し待っててくれ。

そして下を向くハセヲは転送されていった。

——マク・アヌ

そこは水の都をイメージして造られたタウン。

ハセヲはタウンに着くなり広場に向かって歩みを進めた。すれ違うPC達すべてが敵に見えてしまう今の自分に恐怖を感じていながらも、抑えきれない怒りの衝動を抑えて進んだ。

するとフランスの凱旋門がいせんもんを思わせる大きな門を抜け、噴水のある広場に抜けた。そしてお気に入りお気に入りの場所に向かおうとするハセヲをすれ違い際に止める者がいた。

「君が死の恐怖か？黒いオーラが目に見えるぞ」

そいつは緑の長髪を一本に結わいた気取った感じのPCだった。ハセヲは歩みを止められた事と気取った喋りに怒りが爆発寸前になっ

だが、気にせず無視しようとまた歩き出そうとした時だった。

「榊さんの話はまだ終わってませんよ、人の話しは最後まで聞きましょう?」

お節介な喋り方の女P Cがまたハセヲの邪魔をした。それにはハセヲもさすがにキレそうになり、文句の一つでも言おうと振り向いたとき、ハセヲは自分の目を疑った。

「志乃…?」

違うと分かっているながらもついその名前が出てしまった。が、そんな馬鹿な自分に更にイラついたハセヲに追い討ちをかけるように榊と言うP Cが馬鹿にしたように髪をかき上げて言ってきた。

「アトリ。この子はアトリと言うのだよ、ハセヲ君。この手のネットゲームに同じデザインのP Cがいるのは珍しいことではないだろう?」

これにはハセヲも怒りが爆発した。アトリと言うP Cをどけて、榊の顔に殴りかかろうとした。

「デメエ… いちいち」

だが、ちょうど良くショートメールが来て殴りかけずに終わった。ハセヲはこんな時と言いながら宛先を見た時、目が変わった。

——オーヴァン!

そしてハセヲは榊とアトリの事を忘れて階段の上に見えたオーヴァ

ンを追った。

「待て！まだ話しは……くそ、君達PKKが行っている行為はPKとかわら無いんだぞ！」

——オーヴァン……3ヶ月間にハセヲをPK達の間の手から救い、自ら建てたギルド「黄昏の旅団」に入れてくれた謎多き男。

第2章 「PKKハセヲ」(後書き)

今回は出来るだけ早く更新したいと思います。
ご意見、感想待っています！

第3章 「思い出」

階段を駆け上るとオーヴァンは居なくなっていたが、もう一通メールが来た。

——ハセヲ話しがある。

「△隠されし 禁断の 飛瀑・アルケ・ケルン大瀑布」に來い。

来たばかりのメールを読み終わったハセヲはゲートへと急いだ。と同時に、^{さかき}榊たちはまだ広場に居た。

「榊さん？」

ハセヲの背中を敵意むき出しで睨^{にら}む榊にアトリは心配そうに名前を呼んだ。でも振り向いた時の榊の顔はいつもの優しそうな笑顔が戻っていた。

「じゃあ、行こうかアトリ」

アトリがホツとしながら返事をする二人で何処かへと歩いていった。

——△隠されし 禁断の 飛瀑

転送が完了したハセヲが最初に見たものは前と変わらないオーヴァンの後姿だった。そんな後姿に何処かで懐かしさを感じる自分が嫌になり、ハセヲは少しうつむいた。が、すぐに顔を上げてオーヴァンへと駆け寄った。

「久しぶりだなハセヲ」

オーヴァンはハセヲを見ずに言った。その声はやはり前と何一つ変わらず、落ち着いていた。

「久しぶり？なにとぼけた事言っただよ！あんたが居ない間に志乃は、志乃は…何でいなくなったりなんかしたんだよ！何で俺達を見捨てたんだよ…答えるよ！」

—そうだよ。

あんたが居てくれさえすれば、志乃はきっとあんな事にはならなかった。

あんたが俺達を見捨てて消えちゃったから、志乃は—！

あの時、オーヴァンが俺達を見捨ててなんていなければ。そう何度も呪文のように心の中で言い続けていたハセヲは思いのすべてを目の前のオーヴァンにぶつけた。そんなことしても何の解決にもならないと分かってはいたが、ハセヲは怒鳴ってしまった。

「今日、三爪痕^{アイツ}が帰ってくる…あの悲劇の舞台に」

オーヴァンはハセヲの言う事など、まるで聞いていなかったかのよう
にハセヲにすれ違い際に呟いて消えていった。ハセヲは何も言え
ずにただ棒立ちしているしか出来なかった。そしてオーヴァンが完
全にいなかった後、ようやく我に帰り、状況を飲み込んだ。

三爪痕^{アイツ}が帰ってくる——！

その言葉が頭によぎり、ハセヲはあの悲劇を思い出していた。

ハセヲは志乃に呼ばれてグリーンマ・レーブ大聖堂に来ていた。だが
そこは、いつもとは違う。雰囲気から何から何まで違っていた。空
を見上げればノイズが走ったようになってい、大聖堂のあちらここ
らにも傷が出来ていた。

嫌な予感ではなく、背筋から嫌な感じが押し押せる。そして扉の前
に立ち、中に入った。そこはいつもとは変わらない大聖堂だった。
少し安心したハセヲはそれまで飲んでいた息を吐いて、奥へと歩き
出そうとした瞬間^瞬大聖堂の奥で倒れている志乃を見た。

「志乃…？」

ハセヲは驚く間も無く、駆け寄った。そして志乃の頭を支え、

「おい、志乃！起きろよ！頼むよ…志乃！」

と呼びかけた。すると目を閉じていた志乃はゆっくりと目を開けて、ハセヲに力ない笑顔を作って見せた。

「私なら大丈夫だから。心配いらないよ…」

今にも消えてしまいそうな細い声でハセヲに言って聞かせた。が、あまりにも力ない声、笑顔で今のハセヲが心配しないはずは無かった。

「心配するなって、そんな声で言われたって無理だよ。志乃、何があつたんだよ。」

ハセヲの願いもむなしく、志乃の体は光の玉となって、足から消えてきた。

「嫌だ…消えるな！消えんなよ！志乃！心配いらなくていいただろ？志乃！」

泣き叫ぶハセヲの頬に優しく手を沿えて、最後に困った笑顔でハセヲに呟いた。

「泣かないの、男の子でしょ？」

「志乃…？」

そして大聖堂の天井に向かって光の玉は消えていった。ハセヲの手には志乃の顔はもう無い。残ったのはハセヲの叫び声だけ――

思い出し終えたハセヲは、ゆっくりと目を開け、歩き出し、タウンに戻って行った。

とその頃。オーヴァンは一足早く大聖堂へと来ていた。そしてハセヲと同じく、あの日のことを思い出していた。

―グリーマ・レーブ大聖堂

夕日の紅い光が差し込む大聖堂の窓を眺める一人の女性がいた。そして後ろから異様な姿の男が近づいていた。だんだんと縮まる二人の距離。

ようやく女性は男の存在に気がついて声をかけた。

「オーヴァン？」

男はオーヴァンだった。その雰囲気は今までの落ち着いたミステリアスな感じとは違っていて、苦しんでいるようで、あの変わった感じの左腕は鎌の様な形になってい、その周りには黒い斑点が舞っている。

「志乃…今の俺はお前に何を…するか解らないぞ」

だが、志乃は逃げようとはしなかった。むしろ、逆にオーヴァンに近づいて行つた。まるで苦しむオーヴァンの事を助けようと手を差し伸べた。が、無常にもオーヴァンの左腕が志乃の体を貫いた。

「志乃………すまない。」

オーヴァンは自分の左腕を志乃から引き抜いて、倒れる志乃を見送つた。

大聖堂の奥にある、昔は女神が祭られていたと言われている祭壇に
トライエッジ
三爪痕のサインを刻み、倒れている志乃に別れを告げることなく消えていった――

——水の都マク・アヌ

タウンに戻ってきたハセヲはもう一度ゲートから「隠されし 禁断の 聖域」のエリアワードを入力して三爪痕の来る悲劇の舞台へと向かった。

——グリーマ・レーブ大聖堂

エリアに着いたハセヲは不適に笑いながら大聖堂を見上げた。今の
大聖堂は傷など無く、通常の状態だった。

——アイツが帰ってくる…！

これで、これでやっと志乃を助けられるんだ！

そしてハセヲは歩き出した。運命の戦いへと——

第3章 「思い出」(後書き)

この次はカイトとの戦いになる訳ですが、志乃がオーヴァンにやられた時の事とか勝手に作っちゃってすみません！この事も含めて感想を待っていますので、気軽に言っして下さい！
では、呼んでくださってありがとうございます！

第4章 「激突」

——トライエッジ
三爪痕

ハセヲはそう呟き、一歩一歩ゆっくりと大聖堂の扉へと近づいた。復讐出来る喜びと、三爪痕への恐怖が入り混じるハセヲの手は少し震えていた。

そして扉に手をかけたハセヲは、一気に扉を開いた。やっぱりそこはあの日から何一つ変わらない。それはまるで、ハセヲに重くのしかかる罪悪感を忘れさせないための様に。

聖堂内を奥に向かって歩き出したハセヲは聖堂内を見渡しながら昔のことを思い出している。思い出すのは全部、つらい思い出や、悲しい出来事ばかりで楽しかったことや、嬉しかった事は何一つ浮かんでこない。けれどハセヲは、その思い出を三爪痕^{やつ}への怒りに変えている。

——早く来い！三爪痕！！

大聖堂の前にオーヴァンが立っていた。周りには黒い斑点^{はんでん}の様な物が浮かんでいる。それに向かってオーヴァンは問いかけた。

「志乃。ハセヲは強くなったよな？」

黒い斑点は否定するようにオーヴァンの前で動きを止めた。そして

オーヴァンが歩み出そうとした時、蒼い光が大聖堂に向かうのが見えた。オーヴァンはただじっと、その光を見ていた。

その頃ハセヲは、聖堂内の奥にある祭壇の前に立ち、祭壇にある三爪痕が付けた傷を見ていた。

——ハセヲ——

いきなり自分を呼ぶ声が聞こえハセヲは辺りを見渡した。だが、聖堂内に設けられた席には誰も居ない。だがその時、「ポーン」という高い音と同時にエリアの雰囲気が一変し、ハセヲの頭上から蒼い炎の玉が漂いながら降ってきた。

ハセヲがその炎の玉に触れようとしたとたんに炎の玉が勢い良く燃え盛り、その衝撃にハセヲは後ろへと吹き飛んだ。

「くっ！」

吹き飛んだハセヲが顔を上げると、そこには燃え盛る蒼い炎から全体的に黄色いデザインのPCプレイヤーキャラが現れた。

——大聖堂前。そこにはまだオーヴァンがいた。

「来たか…追跡者よ。」

オーヴァンのサングラスは夕日に染まり、目が見えない。そして周りを漂う黒い斑点は世話しなく動いている。それはまるで、これからハセヲの身に起こる事を案じているかの様に…。

——大聖堂内。

対峙するハセヲと謎のPC。しばらくの沈黙は、謎のPCが両手に黒い双剣を出した時に破られた。それは謎のPCが体の前で双剣を構え、刃を出した時だった。

一本だったはずの刃が開いて三本になった。それはまるで——

——三爪痕。

「デメエエエエ!!」

ハセヲは叫ぶと、両手で腰から激しい光を放ちながら双剣を出し、その勢いで謎のPCに突っ込んで行った。怒りと憎しみ、そして志乃への想いを力に変えるように鬼のような形相ぎようそうのハセヲは両手の双剣で切りかかる。

だが、謎のPCは立ち位置すら変えることなく、しかも片手でハセヲの猛攻を完封している。

弾丸を発しているかのような金属音が聖堂内に響く。と同時にハセ

ヲの叫び声も響く。

びくともしない三爪痕にハセヲは怒りの他に一瞬、ある感情が浮かんできた。

——恐怖。不安。無力感。

だが、それを振り払うように大振りの一撃を放つ。が、その一撃も難なく防がれた。

「まだまだ！」

ハセヲは一旦後ろに下がり三爪痕との距離を取り、思い切り上へと跳び上がり双剣をしまい、肩の後ろから大剣を取り出しながら、空中で三爪痕の方へと力の限り大剣を振り下ろした。

——大聖堂前。

大聖堂内ではハセヲと謎のPCが戦っているのだが、外に居るオーヴァンはただ外から大聖堂を眺めているだけ。何を考えているのか分からないが、ハセヲの身を案じていない事だけは確かだった。

逆に黒い斑点の方が心配している様にも思える。

「これでいい。安心しろ、志乃。」

黒い斑点に向かってオーヴァンはその一言だけを言うと、また大聖堂へと目を向けた。

——大聖堂内。

ハセヲが振り下ろした大剣は謎のPCに当たることなく聖堂内の床を直撃した。そのせいで辺りには煙が立ち込めた。ハセヲは煙の中を必死に見渡して謎のPCを探した。その時だった。煙の中からハセヲめがけて謎のPCの双剣の刃が向かってきた。

またしても後ろへと吹き飛んだハセヲが次に顔を上げた時、謎のPCは双剣をしまっていた。完全になめられたと感じたハセヲは激しい怒りとともにある人物の顔が浮かんできた。

——ハセヲ。

「志乃…。」

向かってくる謎のPC。ハセヲは起き上がり、腰から大鎌を取り出しながら叫んだ。

「まだまだああああ！！うおおおお！！」

大鎌は風を切り、その刃は謎のPC目掛けて行く。だが、謎のPC

は右手を向かって来るハセヲの方へと伸ばし、次の瞬間。データの破片で出来た腕輪のような物が現れ、無数の光の筋がハセヲへ飛んで来た。

——大聖堂前。

オーヴァンへと腕輪から放たれた光の筋が飛んで来た。だがオーヴァンは封印してある左腕の拘束具で光の筋を弾いた。

黒い斑点はハセヲがやられたと察して動きが機敏になり、オーヴァンを大聖堂に入るようにと誘導しようとしているが、オーヴァンは動かない。そして黒い斑点はあきらめて大人しくなった。

——大聖堂内。

光の筋が直撃したハセヲはその場に倒れていたが、力を振り絞ってギリギリ立ち膝をついたが、ハセヲのPCのデータの一部が目の前へと浮かんできた。そして自分の体を見るとハセヲのPCデザインはノイズの塊になっていた。

「あ…ああ。あああああああ！」

ハセヲは叫ぶと前へと倒れ、目は虚ろ^{うつろ}を向き、PCデータが破壊されて行った。

——志乃。ごめん。

第4章 「激突」(後書き)

久々の更新ですが、次からはペースアップして行きたいと思います。

呼んでいただいた人へ。

感想や意見をどんどんください。

ではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1152d/>

.hack//G.U ANSWER

2010年10月12日00時06分発行